

特集：産業医と放射線医学

【巻頭言】

竹川 佳宏 (徳島大学医学部保健学科)
國友 一史 (徳島県医師会)

最近、我々専門領域の学会をとわず、医療被ばくに関連する問題があちこちで取り上げられるようになってきた。特に放射線診断技術の発展や、医療機器の開発と急速な普及に伴い、放射線診断の際に発生する医療被ばくの増加は、様々な有害事象を引き起こすと共に、後世に悪影響を残す可能性も懸念されている。

放射線治療の現場では、癌の治療と障害という表裏の関係から、早くより、生物学的・物理学的に多くの基礎研究がなされ、臨床面においても、使用される放射線関連機器の改良等により、当初から医療被ばくの認識と対策が、十分に徹底されてきた。徳島大学においても、前河村教授の専門領域として、放射線の正常細胞・組織に対する障害をテーマとした基礎・臨床研究の両領域で、多くの成果が発表され、実際の放射線治療の現場においても実績をあげてきた。

また、徳島大学医学部保健学科放射線技術科学専攻には、四国地区の医療用線量標準センターが依託され、放射線治療施設での安全な放射線治療の遂行に協力する事を目的に、線量計の校正や出力測定等を、行政に代って活動してきた。各地区センターのチェックを受けた約500程度の放射線治療施設の一覧表は、学会誌に掲載され公表されている。

他方、何故か放射線診断においては、小児や妊産婦等を対象とする場合を除けば、つい最近

まで、医療被ばくに対して無関心であったといっても過言ではない。集団検診においても然り、医療の現場においても然り、早期発見や治療の前提として医療被ばくは、あたかも当然のごとくに容認されてきた。其の結果、今や日本国民の医療被ばくは、世界一となっている。このまま放置すれば、この傾向は益々増加の一途をたどることになる。

数年前より、西谷教授のグループによる医療被ばくの研究が引き金となって、学会の中で専門委員会を中心とした対策がスタートした所であり、その成果が期待される。

本邦は、世界のなかで唯一原爆の被ばく体験国であるがために、放射線に対して国民的にアレルギーを抱いており、原子力発電に関してもその一端が伺え知れる。

21世紀は、病気中心の医療から患者中心の医療へと様変わりし、医療の選択も然ることながら、医療の評価をも患者が行う時代となってきた。患者の医療被ばくに対する関心はますます高まっていくであろう。

まさにこの時期に、本学術集会において企画された、それぞれの分野における専門の先生方の講演を拝聴すると共に、原点にもどって医療被ばくを見直すことにより、21世紀において悔いの残らない医療が行われる事を念願して、巻頭言としたい。